てんかん治療 ネパールで支援

広島大病院 来年から

広島大病院(広島市南区)は2020年1月から2年間、ネパールでのてんかん治療支援事業に取り組むことを決めた。同病院の「てんかんセンター」の医師が現地に赴くなどして医師や看護師、技師たち約50人の養成を目指す。

計画では、飯田幸治センター長たちが年2回、現地を訪問。首都カトマンズの病院や周辺地域で開かれる無料診療キャンプで診察や脳波検査の指導、助言をする。広島大病院での研修のため現地の医療者も招く。

解析の難しい脳波データを病院間で送受信し、遠隔診断する仕組みづくりも計画されている。飯田センターは「実現に協力したい。システムができれば日本に転用し得る」と話す。

センターによると、ネパールのてんかん患者は15万人と推計されるが、同国の専門医は7人程度。医療者の間でも病気への理解が進んでいない、という。広島大病院は、同国への留学経験がある現地の医師を支援してきた縁で事業化することにした。

一連の事業は国際協力機構(JICA)の支援事業に採択され、1千万円の資金援助を受ける。

(田中美千子)

クリック

てんかん 脳が過剰に興奮し、けいれんや異常行動、意識消失が起こる病気。脳の形成異常や脳梗塞など原因はさまざまで、年齢を問わず発症する。薬による治療が主流で、近年は外科手術も普及しつつある。